



さらしな の 里



友の会だより

第21号

2009・秋



十王図の掛軸の意味を確認する芝原区の役員のみなさん。左奥に涅槃図（9月23日撮影）

閻魔大王に肝冷やす

芝原の阿弥陀堂三福寺

千曲市芝原区の西の地域に、古くからのお堂がある。雲晴庵阿弥陀堂三福寺。更級地区で通称、「堂の山」と呼ばれている山の東側の裾にあり、昔から住民に親しまれ信仰のための祭り場であり、心の寄りどころとしての場所でもあった。

このお堂の開基は、いつの時代か確かな記録はないが、天保六年（一八三五）、今の長野市小田切塩生にある九品山三福寺の住職が、隠居の身となり当地を訪れ、定住したと思われる。お堂に隣接する墓地には、僧籍と思われる墓石が、それより約百年前の宝暦年間から、九基ある。

茅葺きの寺院造りのお堂であった。仏壇には立派な阿弥陀如来像と、寂誉上人の座像と歴代住職の位牌が祀られている。古くから芝原区で管理していたが老朽化が激しくなつたので、先の大戦後、改築し、瓦葺きの建物となつた。

春と秋の彼岸の中日に涅槃図と十王図の掛軸が展示されます。戦中までは閻魔大王の恐ろしさに肝を冷やし、帰りには、おだんごをいただき心を落ちつけたものでした。

涅槃図は、室町時代の画僧 兆殿司の筆とも伝えられる貴重な掛軸であり、お釈迦さまが入滅のときに、大勢の弟子や生き物たちが悲しんでいる図です。

十王図は生前の行いの善悪を順次審判する様子を描いたもので、人生の戒めとなつて現代の社会教育、道徳教育と通じるものであり、青少年や社会人にも広く見ていただきたいと思ひます。

（芝原区・宮原実雄）

巨大毛虫、白髪太夫との奮戦記



六月八日の朝十時ごろ、三島神社の北側に新居を構える甥から、悲鳴にも聞こえる電話がかかってきた。「おつちゃん、お宮のケヤキの木が青くなつて、道も変な毛虫で通れぬや」

サンダル履きで現地へ飛ぶ。「ナンダコリア」と道路を渡る毛虫の集団に足を踏み入れた。その時「ブシユ」と内臓が破裂して、足からスポンにかけて付着する。その悪臭が鼻をつき、吐き気を催した。毛虫の発生源は個人のクルミの木（写真左）。こんなに大きい毛虫に何で気づかなかつたのか。体長十センチ。青白色に白い毛が生え、腹は黒色。この日の午前ですっかり葉は食べつくされ、枯れ木のようになつた。話はたちまち近所に伝わり見学に押し寄せる。大正生まれの人も、初めて見るそつだ。しかも、先祖からも聞いたことがないという。とにかく毛虫の名前を調べないと対策にならない。インターネットで凶鑑を検索したら「楠蚕、別名白髪太夫、栗毛虫、栗虫」という厄介な毛虫（写真中央）であることがわかつた。楠蚕は地方によって白髪太夫とか白髪下



口などと呼ばれている。そして、クリ・楠木・クルミ・クヌギ・ケヤキ・トチなどの葉を好んで食べるという。

成虫の蛾は「夜蛾」と呼ばれ成熟した果実の蜜を作る前に一瞬にして葉を食い尽くしてしまうのだ。既に繭を作り始めた場所を見ると、建物の下屋・大きな石の凹み・木の表皮の中・ケヤキの小枝などいたる場所を族の代わりにしていた。

繭の形は撚糸を合わせ、網目状になつた楕円形をしている。通称「透かし俵」といわれ、現在も、この茶色の繭からつむいだ糸は丈夫で、高級な着物の帯になつていると言われるから「ビックリー」だ。幼虫は半年なら五〜七月にかけ、ふ化し自然淘汰されたりして、人目につかない程度の数になる。しかし近年の温暖化現象で二カ月も早く一挙にふ化してしまつた。そして、繭を作る場所を探し集団で降りてきた。道を横断して三島神社のケヤキに登り始めたので「青いベルト状」に見えたのだ。

「お宮のケヤキ木がやられる」と恐怖がわいた。あんずの収穫期で消毒はできないので、人海作戦だ。ほうきでたたき落とす、太い枯れ木で一匹ずつつぶすのだ。朝十時ごろ下り始めることもわかつた。午後七時にはピタと止まる。いいこと考えた、釣りざおの弾力を利用して高いところから木の表面を勢い良く滑らせるとバラバラと落ちて動かなくなる。二日目ではほぼ退治した。ところが、今度は三島神社境内の樹齢二百年、高さ二十五



高さ二十五

の小柿の木が二本がすっかり食い荒らされた。卵を産み付けた木の葉がおもしろいらしい。

近所の男衆が交代で退治したが手に負えない。クルミの木と同様、列をなして下り、たちまちケヤキの木に登り始めた。そこでひらめいたのが、族の代わりには大量のワラを幹に巻き付け、その中に閉じ込める作戦だ。これはうまくいった。二時間くらいでワラ束の中が満杯になつたところで処理した。これで休息も取れた。処理を繰り返して二週間目で、騒ぎはおわつた。隣の上山田にも大発生したようだ。

三カ月後の十月の始め、夜蛾を外灯の下で見つけた。ほとんど動かさずだつた。通常益こる羽化すると言われていたが、八月に入り急に低気温が続く、しかも遅く羽化したので自然淘汰されたようだ。来年の動向はどうだろう。

（羽尾四区・大橋静雄）

嫌われ者 おしゃれに変身！



さらしなの里歴史資料館で開催された夏の草木の布教室「葉っぱだつて虫の繭だつてランプに変身」では、害虫として嫌われている愛称シラガダユウの繭が、シックな灯火になつてほのかな明りに揺らいだ。葉を蝕む幼虫の美しさにも負けず、網状の繭には張りがある。時はエゴの時代！使わない手はないと、ランプの傘に利用した。お父さんと参加した男の子が後日「あのランプの灯がね、不思議だから寝る時いつも眺めてるんだ！」と嬉しそうに語りかけてくれた。（さらしなの里歴史資料館 荒井君江）

山の花もある

おらほの冠着

21

冠着山は姨捨伝説でよく知られ、また最近、山頂に舞うヒメボタルも話題になっている。そして意外に美しい花の多い山でもある。

ある年の五月二十六日、旧坂井村方面（現筑北村）から登ったとき、山頂付近でたくさんのお花を見かけた。アザミ、ニリンソウ、ラシヨウモンカズラ、クルマバソウなどだ。

その他、名前の分からないものがいくつもあった。ラシヨウモンカズラ（写真上）は「羅生門蔓」と書き、解説書によると、花冠の形を羅生門で渡辺綱が切った鬼女の腕に見立てたとある。羅生門とは平安時代の都である平安京の正門で、この門



に巣食う鬼と渡辺が戦う武勇伝が謡曲にもなっている。なにかおどろおどろしい名前ではある。クルマバソウ（写真下）は葉が車のように輪生しているので分かりやすい。葉には芳香があるそうだ。

季節がもう少し夏に向かうと、アジサイがたくさん見られる。仙石口から車道のわきに、そして羽尾口の久露滝の上などに。素朴な花の形から自生のものと思う。

里から眺める冠着山も心に安らぎを与えてくれるが、山から眺める北アルプスの山並みも山頂付近の花々も心を和ませてくれる。まだ登ったことのない方には登ることをお勧めしたい。坊城平からはゆつくり歩いて一時間、坂井村側からは三十分ほどで山頂に達する。（羽尾四区・塚田正志）



〔編集後記〕「友の会、たより」の秋号はいつも縄文まつりに合わせて発行しているのですが、ことしは新型インフルエンザの流行を受け、中止となりました。まつりに向け準備を進めてきた更級小学校の子どもたちは、かなり残念だったようです。

今号はその無念さを吹き飛ばすような楽しい記事があります。白髪太夫についての太橋静雄さんの報告は臨場感たっぷりです。駆除の対策までしっかり紹介してくださっています。嫌われ者でありながら、繭の糸はとも丈夫で人間の暮らしにも実は役立っていることを、荒井君江さんのランプも示しています。「怪獣みたい」という人もいます。

明徳寺の琵琶は更級に伝わる民話を、語り部グループのみなさんが披露する際、合の手としてこれまでも掻き鳴らすことがあったそうです。オーケストラとの合奏も可能になったとのことなので、どんな音色がこれから生まれていくか楽しみです。琵琶の音色を使った「明徳寺の歌」もいつか聞いてみたいです。

阿弥陀堂というと、羽尾のものがよく知られていますが、芝原のものも由緒があります。掛軸は彼岸の中日、年に二回、二日間だけのご開帳です。お堂の中いっばいに広がった光景は圧巻です。冠着山の植生の豊かさ、これからもつと気にしながら登ることにしたいと思います。

編集・発行

さらけの里友の会たより編集委員会

事務局・さらけの里歴史資料館

〒三八九・〇八二二

長野県宇都宮市大字羽尾二四七の一

電話 〇二六（二七六）七五一

Fax 〇二六（二六二）四一六一